

中村武羅夫

德田秋聲氏



徳田秋聲氏



空の晴れた春の一日、徳田秋聲氏をその本郷森川町のお宅に訪うた。幸い在宅で、六畳の一室——秋聲氏の書齋でお目にかかった。無論初めてお目にかかったのである。南向きの一室で、日あたりが好い。秋聲氏は左の肘を机に突いて、右の手を大い瀬戸物の火鉢に軽く置いて居られた。秩父総の着物にこまかい縞の茶色ツぼい羽織を着て居られた。髪は長く刈られたが分けては居ない。濃い髪で、ごわごわと少しちぢれ気味である。髯はあまり濃くなく短かい。顔色は蒼く底濁りがして血色が冴え

ない。顔の輪郭は細筋で、眼は一重瞼の優し味のある眼だ。その眼から細く締った口元から鼻から、男らしい、がいがとしたところがない。声が妙である。葵山氏の声とは違う。咽仏のところから幽かに顫えて出る。舌は少しも働かないような声である。誰れでも初めて秋聲氏に接した時には、秋聲氏独得の此の声に、一番気がつくであろう。口は重い方である。何か話される時には、屹度その眼でじつと相手を見詰められる。そして話をする間は、瞳が据って、動かない。が、その瞳には人を圧するような重い力がない。鋭い光りがない。いらいらとした



反抗的の影がない。思うに心の優しい人であろう。さればと云って同情の深い人とも思えぬ。優しいのと同情の深いのとは意味が違ふ。縦し同情の深い人としても、同情は同情として胸に包んで、吾れと進んでその同情を實行せられる人ではない。単に同情のみではなく、日常生活に於ても、文芸の上に於ても、秋聲氏は積極的の人ではない。極めて消極的の人であると思つた。吾れと自ら求めて煩悶もし、懊惱もすると云つたような、デカダンの的の面影は、秋聲氏の性格に於て見出すことが出来ない。煩悶し、懊惱するにしても、衷心より湧き来つた煩悶懊

悩ではなく、外部から来る余儀ない情実の下に、煩悶懊悩する人であろう。煩悶し懊悩すると云うより、それを深く考えて解決すると云った方が適當である。悶え悩むべき事がらも、悶えず悩まず、只何所までも深く考えて所決する——極端に云うと、秋聲氏には考えると云うことがあつて、深く悶え、深く悩み、深く悲み、深く泣くと云つたようなことのない、極めて理智の力の勝つた性質の人らしい。で、秋聲氏の人物には、しんみりとした、どんな大きい問題でも長い間みつきりと考え得られる、ねばり強い——心の底にしい重いところはあるが、今



の小説家に有り勝ちな、動揺し、混乱した。いら立った苦悶の影がない。恐らく、深く考えると云うことが秋聲氏の生命であろう。

その作物を見ても分るが、秋聲氏にはバツとした華やかなところが無い。秋聲氏の人物の色は、しぶい、くすんだ色である。人の眼を眩めかすような、けばけばしい色彩がない。極くじみ、みな人である。それで、自分を超然としたり、皮肉に人を見たりするような厭やなところが無い。初めて会っても直ぐ打ちとけ得られる。座談が上手と云うでもなく、お世辞が好いと云うでもないが、妙

にへだてのない、懐しいような気がする。思うにその心に優しきがあるからだと思ふ。

秋聲氏の人物を一括して云うと、地味な人である。温かいところははないが優しいところがある。極めて理智の力の勝つた常識の人である。悶えず、悩まず、只何所までも深く考ふる人である。で、接して見ても、その胸まで触れ、その手を握りしめたいと云うような、切実な願いと敬慕の念は起らないが、何となく只懐しい人である。優しきのある接し易い人である。

自分は秋聲氏に初めて会つて、然う思つた。





日本文学電子図書館

---

現代文士廿八人

著 者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

---

日本文学電子図書館